

「ガリツ、ガリリツ」。先端

がかぎ状の鎌を幹に押し当て、白い軌跡からじわじわと樹液があふれ出した。10月、少し肌寒くなつた大子町の山林で、大子漆の保全に取り組むNPO法人「麗潤館」（矢崎孝子理事長）が主催した漆搔き体験に参加した。

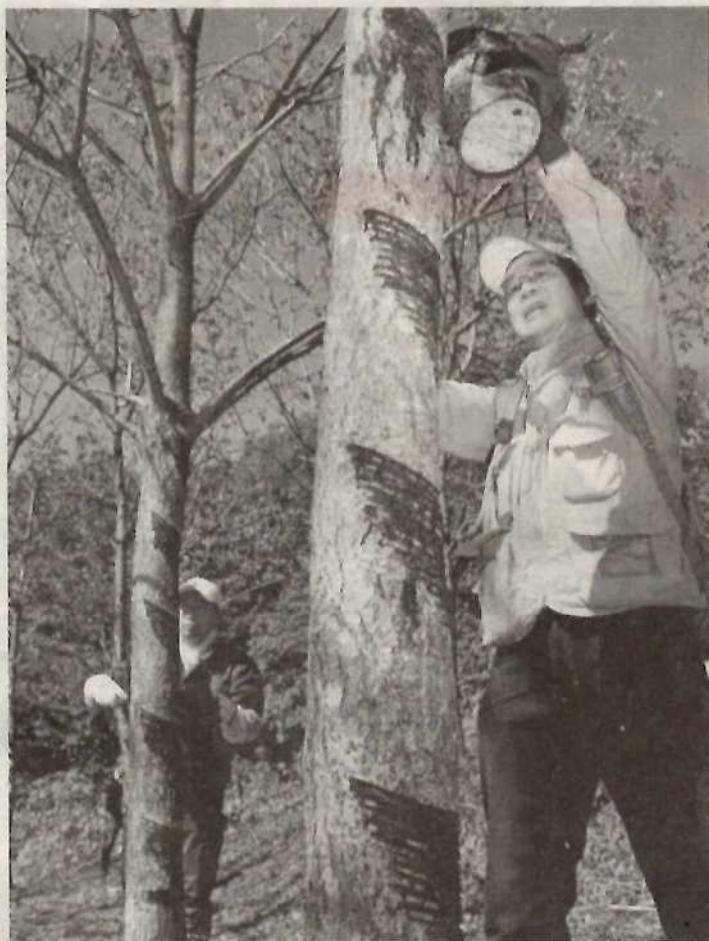
木の幹に小さな傷をつけ、植物の生理作用で集まる樹液を“頂く”。デリケートな作業に、「なんか痛そう…」と記者が躊躇していると、「手早くや

らないと、大事な滴が落ちてしまつ」とこの道60年、大子漆保存会の飛田祐造会長がぴしゃり。

1本の木から取れる漆の量は搔き手の技術に大きく左右され、初心者では100㌘に満たないが、熟練者では倍以上にもなる。天候や湿度によつても量や質が変わるといい、自然との対話が必要とされるなんとも奥深い作業だ。



「体験型」県北振興の鍵に



大子で漆搔き

江戸時代、水戸2代藩主の徳川光圀が植栽を奨励したとされる大子漆。上質で輪島塗などの高級漆器に使われてきたが、明治以降は安価な輸入品の台頭で衰退し、職人の技術継承も課題となっている。

取材では、数年前に漆搔きを体験したことがきっかけで、県外から移住してきたという男性が躊躇していると、「手早くや

う」と危機感を覚えたという。都内に住む矢崎理事長も、漆搔き体験から立ち上がった一人。麗潤館は、大子漆の植栽や技術継承に取り組んでいる。

「ここにしかないもの」を実際に体験してもらうことで、新たな人材やアイデアを呼び込む。そんな「体験型」イベントのインパクトを最大限に活用していくことが、これから県北の奥深さに魅了され、「この素晴らしい技術が無くなってしまだった。

（緒方優子）